

論文内容の要旨

報告番号	氏名
	橋本 彩
Adjuvant Hepatic Arterial Infusion Chemotherapy After Resection for Pancreatic Cancer Using Coaxial Catheter-Port System Compared with Conventional System	
(和訳) 膵癌術後予防肝動注療法におけるリザーバー留置術の検討 —従来法とcoaxialシステムの比較—	

<論文内容の要旨>

【背景・目的】膵癌は予後不良であり、根治手術後の症例においても早期に再発・転移をきたすことが少なくない。再発部位として肝転移の頻度が最も高く、術後補助化学療法が進歩した近年においても、肝転移の制御は重要な課題の一つである。膵癌術後症例に対する肝動注療法は肝転移予防に寄与する可能性があるが、術中操作や術後膵液漏などの影響で腹腔動脈や肝動脈に狭窄・蛇行が生じることが多く、動注用カテーテル留置の成功率が低いことが問題とされてきた。本研究では、近年開発されたcoaxialシステムを用いて肝動注カテーテル留置術を行い、従来の留置法と比較して、その有用性について評価した。

【対象】膵癌根治手術後の補助化学療法目的で肝動注カテーテル留置術が施行された93例。2006年3月から2010年8月は、ガイドワイヤーを用いたカテーテル交換法(従来法)を第一選択とし(Group A: 58例)、2010年9月から2012年9月は、coaxialシステム(coaxial法)を第一選択とした(Group B: 35例)。第一選択の手技で留置不成功の場合は、他方の方法に切り替えて手技を行った。第一選択として用いたシステムの留置成功率および手技時間と透視時間を比較した。また最終的に留置された従来法のシステム(51例)とcoaxialシステム(42例)を用いた肝動注療法の合併症と肝転移発生率や生存率を比較した。

【結果】全症例における留置成功率は、Group Bが97.1% に対してGroup Aが86.2%であった(P=0.084)。肝動脈に蛇行・狭窄を有する症例では、Group Bの成功率が有意に高かった(91.7 vs. 53.8 %: P=0.046)。手技時間(64.8分 vs 80.7分, P=0.0051)や透視時間(14.7分 vs 26.7分, P=0.001)はGroup Bが有意に短かった。留置したシステム間で合併症に差は認めなかった(15.7% vs 16.7%, P=0.898)。術後1年以内での肝転移発生率は、従来のシステムが9.9 %、coaxialシステムが9.1%であった(P=0.678)。中央生存期間は44ヵ月であり、システム間で有意差は認めなかった(P=0.312)。

【結語】膵癌術後予防肝動注において、coaxialシステムを用いたカテーテル留置術は手技的成功率が高く、短時間でかつ被曝量を低減できる。また、留置後も従来法と比較して遜色のない合併症の頻度と肝転移制御効果が認められた。今後、膵癌術後で特に肝動脈に蛇行・狭窄を有する症例においては、coaxialシステムを用いたカテーテル留置を第一選択とすることが推奨される。